

赤いベレーの恋人

— タンチョウヅルの記録 —

岩松 健夫 著



赤いベレーの恋人

—タンチョウヅルの記録—

岩松 健夫 著

飛 翔(ひしょう)



著者との
話し合い
により検
印廃止

N. D. C. 916

8095-063005-7764

人類の記録シリーズ
5

赤いベレーの恋人

岩松 健夫

定価 600 円

発行 昭和四十七年七月三十日 ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

〒一六〇 東京都新宿区須賀町五
振替 東京 一四九二七一 番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

製本 石毛製本株式会社

オフセット製版 光明社

オフセット印刷 有限会社トラヤ印刷所

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします)



“樂園に遊ぶツル”

はじめに

岩松 健夫

日本の最東端が北海道の「道東地方」と呼ばれる地域です。

ここは、冬季間の寒さはかなりきびしいのですが、北海道の北の方や、中央部や西南部にくらべると、ずっと雪は少ないところです。澄んだ青い空をバックに、山頂に真白いペールをかぶった雄阿寒岳、雌阿寒岳の秀峰が、気品のある美しさを見せるころになると、その雪よりも白いタンチョウヅルの群れが、山間から人里近くの野や畑地に飛来します。カン高い鳴き声が零下の凍てついた空気をふるわせて、ひとときわ高く響きます。

その声は長年、ツルの写真を撮りつづけている私を呼んでいるようにさえ聞こえてきます。こうなると矢もタテもたまりません。新聞社の仕事を切りあげ、休日を待ちかまえ、彼女たちのもとへと一目散です。

ツルたちはアノラックに赤いベレー帽、でっかい望遠レンズをつけた、迫撃砲のようなカメラをかかえた私を、知っているかのようです。大きく翼をいっぱいに広げて、いく度も羽ばたきたり、雪原をポンポン飛びあがってダンスをしたり、まるで私を



「里近くに集まって」

歓迎かんげいしているのでしょうか。一家族でしよう、子ヅルもまじえた数羽の一群。仲のよい夫婦でしょうか、びったり寄りそった二羽のコンビ。舞いあがり、羽ばたき、エサをついばむ白いツルたちの図しずは、神秘的な美しい世界を見せてくれるのです。

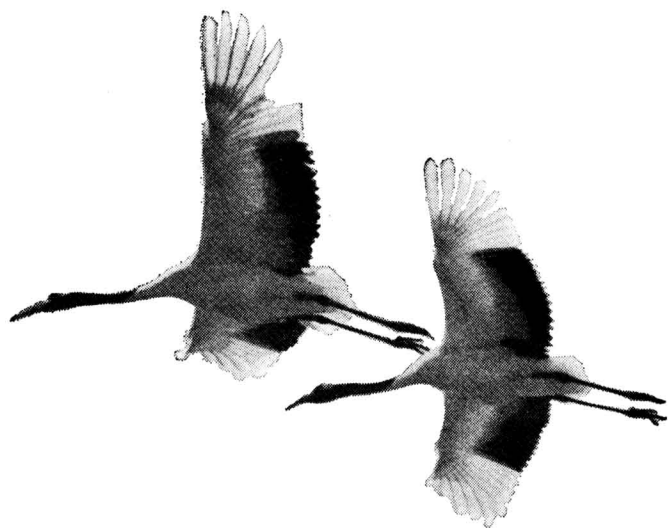
私のツル撮影は、このきれいな、みごとさを忠実ちゅうじつにキャッチし、ひとりでも多くの人に見てもらい、ツルの生態を正確せいかくに理解りかいしてもらうための一念いちねんで続けたものです。

ツルを被写体ひしやたいにした写真のネガは、モノクロ、カラーを合わせて二万枚以上にもなります。最初にシャッターを切った大きな一羽は、いまどこを飛んでいるでしょう。私のカメラがはじめて記録した、ヒナ誕生の思い出の作品のあの赤ちゃんヅルは、もうりっぱに成鳥せいちょうとなつて、道東のどこかで新しい巣づくりをし、かわいいヒナの親になっているにちがいありません。ネガの一枚一枚に、いづくせない思い出があります。心なきハンターに撃たれたり、野火のびにあつて悲しい最期さいごをとげた悲劇ひげきのツルたちのありし日の雄姿ゆうしも、私の記録の中にあり、永久えいきうに保存ほぞんしてやるつもりです。

こんど私のツル撮影の記録が「赤いベレーの恋人」という題で、ポプラ社から刊行かんこうされることになりました。公害こうがい、環境かんきょうの破壊はかいという悲しい時代を迎えましたが、この本の刊行にあたり、私は、心からツルを愛し、自然を守る人たちが、少しでも多くなれることを祈ってやみません。

—
も
く
じ
—





第一章

赤いベレーの恋人^{こいびと}を追って

初めてヒナの撮影^{さつえい}に成功^{せいこう}

赤いベレーの恋人^{こいびと}を追って

月光^{げつこう}の下^{した}のツルの群^むれ

私はカメラ馬^ま

山崎^{やまざき}さん一家^{いっか}のこと

第二章

ツルと人との心のふれあい

道鳥^{どうちょう}から世界^{せかい}のツルへ

ツルのふるさとが大火事^{おおかじ}

ツルと人との心のふれあい

第三章

ツルの愛護^{あいご}運動^{うんどう}



第四章

ツル公園

ツルを助けよう

ツルの作文

ツルのしあわせいつまでも

タンチヨウヅルの生態

四季のツルとその生態

ツルの姿態

ツルのメモ

写真構成

ツルの誕生―成長

カメラ馬ンと子ども

飛翔―その1―

飛翔―その2―

ツルの表情

自然の中のツル

178 146 98 86 64 26



表紙(表)……“雪上の舞い”

表紙(裏)……“稜線を飛ぶ”

背カット……“愛の賛歌”

見 返……“愛の舞い”

本 扉……“飛 翔”

著 者 紹 介

いわまつ たけお
岩松 健夫

1928年釧路市に生まれる。釧路商業卒業後、北海道新聞釧路支社に入社。のち札幌本社、函館支社をへて、1953年再び釧路支社勤務となる。以後17年間、釧路湿原でタンチョウヅルを撮影して話題となる。現在札幌本社編集局写真部次長。

1959年には、東京・北海道の主要都市で写真展を開催。作品は広く海外にも紹介されていて、ニューヨークのメトロポリタン美術館では『二羽の飛翔』が永久保存された。著書には「丹頂鶴」、写真集「丹頂鶴」2種がある。

1961年、北海道釧路市文化奨励賞受賞

1965年、北海道知事表彰受賞

1967年、釧路市自治功労賞受賞

1969年、日本鳥学会賞受賞

現住所

札幌市真駒内南町2

道新社宅A-405

トレス……田代三善

第一章

赤いベレーの恋人^{こいびと}を追って



ツルの編隊

初めてヒナの撮影に成功

釧路市新富士駅からゴトゴト原野を走る村営のローカル気動車で約二時間、鶴居村下雪裡で降りて、丈の長いクマザサをかきわけ、かきわけ、道とは名ばかりの山道をあえぎあえぎ私は歩きつづけました。釧路原野は、一口に三万ヘクタールといわれます。そしてその大部分は、まだまったく未開の湿地帯と、血の気のないような火山灰地帯で、人を寄せつけないきびしい顔をしているところです。

見渡すかぎりどこまでもヨシの原がつづいていきます。はじめてここを訪れる旅行者は、どこまでも広がるヨシの原を見て、「北海道は広大ですね。この作物は何という名ですか。」などと聞くことさえあります。そしてこの原野にはヤチダモ、エゾハンノ木が、奇妙な体操でもしているような形にのびて、あちらにポツン、こちらにポツンと点在しています。こうした木立ちが広い原野をいつそう、とてつもなく広く見せるようです。ちよつと気を許すとずぶずぶと、どこまでも埋まってしまうような湿原には、容易に人も馬も近寄せません。

ここが、美しいタンチョウヅルの世界なのです。外敵が近づいてこれない自然のトリデに守られて、ツルたちは安心して巣づくりをし、ヒナを育て、ツルだけの平和にひたっているのです。



ツルを求めて湿原を行く岩松さん

私はさらに歩きつづけます。私がいま歩いている山道は、正確にいうと北海道阿寒郡鶴居村宮島崎の山道です。そのころまだだれも、ツルの巣づくりやかわいいヒナを、その目で確かめた人はおりませんでした。北海道教育委員会や、釧路のタンチョウヅル保護会でも、ツルの赤ちゃんの生態や巣の営みはどうなっているか、まったくわかっていなかったのです。鳥類学界でも、営巣のすがたは確認されていませんでした。

「よし、ひとつ私とそのナゾを解いてやろう。タンチョウヅルの生態を、カメラで記録してやろう。」

こうした気持ちで、私の心をツルの里さがしに追いやったのです。

昭和二十九年五月末のことで、サクラも散り、初夏の訪れる五月下旬でしたが、この湿原の五月は、まだ早春というよりおそい冬のたたずまいでした。

地図を片手に山道を行く私のいでたちは、漁師が浜仕事のと

き身につけるゴムの胴長、背のリュックサックにはカメラ、望遠鏡、数々の望遠レンズなど、撮影の装備一式。四日分の食糧は米四キロ、ミソ少々、総重量四十キロという、まるで造材人夫さながらのスタイルでした。

ずっしり重い荷を背負つての、たったひとりの行軍です。一步また一步、水がにじむ湿地の山道を、こうして約十六キロも歩きました。

アシはちようど芽ぶきはじめてころでしたが、五月の雪どけシーズンで水があふれ、湿原全体がまるで浮いている島のように、水の中でぶよぶよして、とらえようのないような状態でした。

こうして、人里遠く離れた宮島崎の原野の一軒家にやっこの思いでたどりついたのは、もう真夜中の午後十一時半すぎだったでしょうか。この一軒の民家が、宮島利雄さんという人の家でした。宮島さんは先代が大正十二年に入植していらいここに住み、炭焼きや馬を飼って暮らしている原野の主のような人でした。

一日がかりの強行軍でつかれきっている異様な風態の真夜中の訪問者には、原野の主もさすがにギョツとしたらしい顔で、しばらくは声もありませんでした。でも私があえぎながら、

「北海道新聞社のカメラマンです。ツルの巣づくり、ヒナの姿をカメラに収めたいのです。協力をお願いします。」

と説明すると、やっと安心して、

「まあまあひとまず、あがってゆっくり疲れをとりなさい。」

と、やさしくいたわってくれました。

いろいろの火に手をかざしながら、私のツル撮影計画を話すと、宮島さんは首をかしげ、むずかしそうな表情で、

「しかし岩松さん、むずかしいよ。なんとかできるだけやってみるが……」

と、意外にしぶい返事をしました。

というのは、宮島さんが先代が入植した大正十二年からここに住みつき、そのあたりはよく知っているはずだが、ツルの飛ぶ姿は見ているものの、ツルの巣やヒナなど、ただのいっぺんも見ることがないからだというわけです。

しかし、親鳥が飛んでいるのだからヒナがいらないわけではない。ツルの世界に巣がないわけではない。

「きっとあります。ぜひ協力してください。」

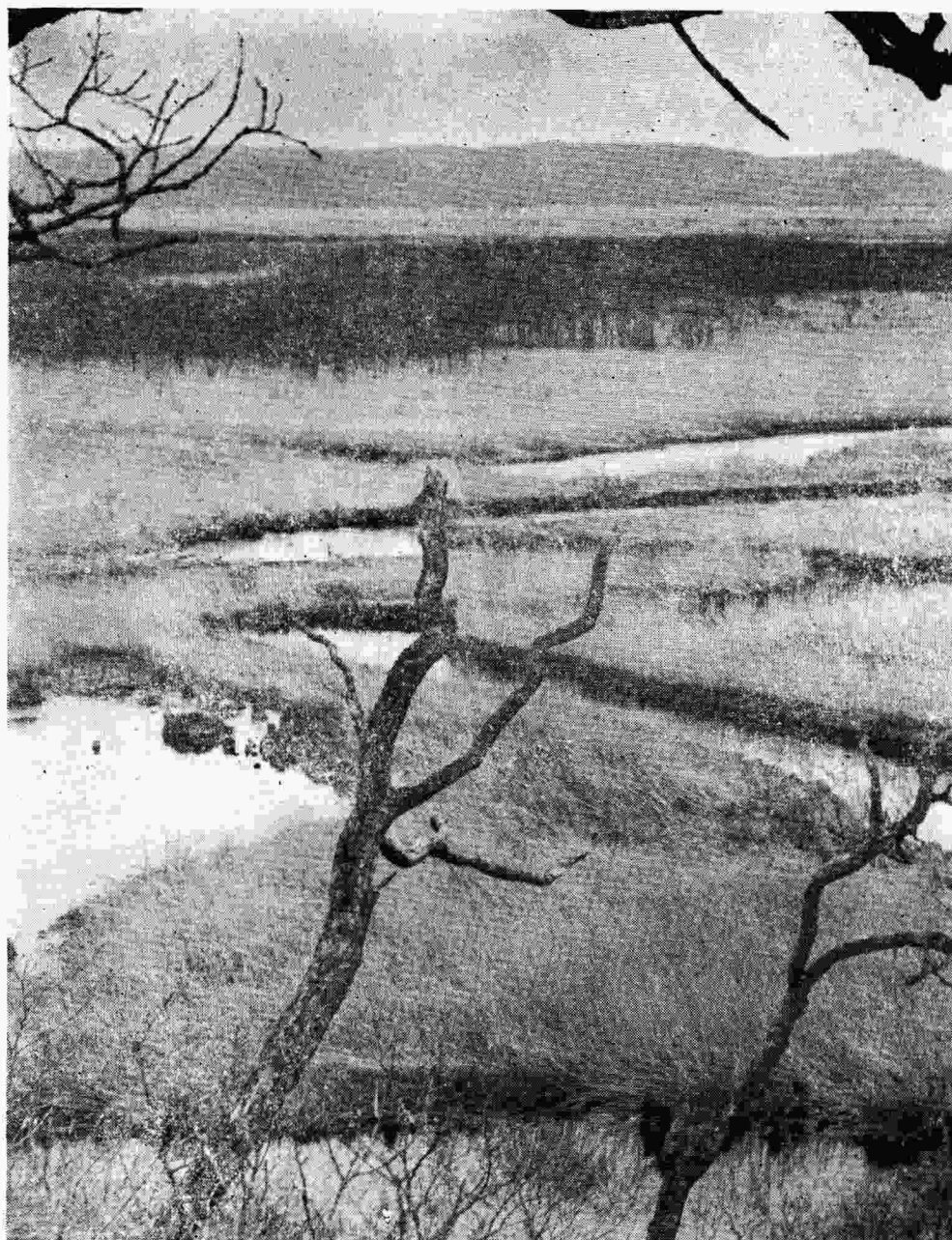
こう懇請する、ツルにつかれた私の必死の願いに、宮島さんもさすがに根まけがしたのでしよう。

「まあ、きょうはゆっくり一晩寝て、あすの朝出かけよう。」

ということになり、私はからだかワタのように疲れているのに、なんとしてもねむれない一夜をここですごしたのでした。

午前四時。やっと明けた原野の朝、カメラの装備を点検して、身じたくをすませ、宮島さんの案内で





ツルのふる里——宮島崎から見た釧路湿原 釧路原野は一口に3万ヘクタールといわれる。その大部分は未開の湿地と血の気のないような火山灰地で、人を寄せつけない。このきびしい自然がツルの生存を助けた。



ヤチハンノ木に登ってツルの行動をみる

チルワツナイ川という小さな川を、カヌーのような小さな舟で上流に約十二キロほど進みました。枯れたヨシの密生地帯は、ところどころに青い芽をふいていました。行く手をさえぎり、視界をじやまして、まったく見通しが悪くてやりきれません。

舟を降り、湿地に足をとられながら、ようやく見つけたヤチ

ハンノ木によじのぼり、あたりを見渡しました。約二千メートルくらい東の方向に、ヨシの茂みから大きなツルが一羽、舞い上がりました、つづいてまた一羽。ツルの夫婦にちがいありません。きつとあのあたりに巣があるにちがいない。私の心はやはり、耳をすませば胸の動機が聞こえるほど興奮していました。よし近づこう。前進しよう。危険だからと、とめる宮島さんの制止をふりきって、私は進みましました。いくたびかころび、いくたびかヤチマナコ（底無し沼）に落ちかけ、胴長も役に立たず、半身ずぶぬれになりながら前に進みました。しかも一時間もかかってやっと五十メートルの前進です。